



関町小通信

平成28年9月1日
練馬区立関町小学校
学校だより 9月号

「算数の習熟度別指導は、先生の個性の違いですか？」にお答えします

校長 福岡 勤

学校公開のアンケートに標題のような趣旨の問いや習熟度別のクラスの分け方などについての疑問点が複数記載されておりましたので、お答えします。具体的な指導体制・形態等については、7月号に掲載しましたが、そもそも「習熟度別指導」を行う理由は何か？から御説明いたしましょう。

第6学年児童を対象とした「全国学力・学習状況調査」が実施されるようになり、毎年、都道府県別にその結果が報じられています。東京都は便宜上3層に分けた上位のグループには入っておりますが、第1回目の調査以来、その上位グループの中でも秋田県・福井県・石川県といった群を抜いている県からは、大きく水を空けられている実態を改善できない状況であります。

これには、様々な要因があると言われておりますが、東京都教育委員会（以下都教委）は、その一つに「復習の実施状況」があると考えています。具体的には、テストで間違ってしまった問題について分かるようになるまで勉強せずにそのままにしている児童の割合が多いことを挙げています。これでは、特に積み上げ型の教科である「算数・数学」においては、その学年の間に学習する内容を十分に理解しないまま進級してしまい、次の学年以降の学習に支障をきたしている児童が多い現状を改善することはできません。

そこで、平成27年度から都教委は「東京方式習熟度別指導ガイドライン」を作成し、習熟度別指導の徹底を図ることにしました。これまでの学級構成員を少なくして個に応じた指導を展開する「少人数指導」から「習熟度に応じた指導」へ、はっきりと舵を切り、転換を図ったのです。これは、「費用対効果が不鮮明なTT（ティーム・ティーチング）指導や従来の少人数指導ではなく、一

歩踏み込んだ習熟度別指導を行う学校のみ加配教員を配置する。」という条件付きでの指導への転換でした。本校の算数習熟度別指導教員も、この約束事に従って配置されております。

また、習熟度別指導の方針として

- 習熟度の程度を把握して学習集団を編制し、その集団に適した教材を用いて指導する。
- 個々の学習状況に応じて、特に知識・理解や技能については、前の学年に立ち戻る指導を徹底する。
- 当該学年で解けるようになるべき標準として具体的な問題（例題程度）を示し、遅れがちだった子供たちに対する基礎的な問題の反復学習を徹底する。

などを示すとともに、単元ごとのドリルと診断シートから構成される「東京ベーシック・ドリル」を活用した指導を推進するようになりました。

まだ十分にこなれたものにはなっておりませんので、御指摘のように「教員の個性による違い」と見えがちですが、指導方法はこれまで以上に意図したものになっております。さらに、指導内容についても上記の方針に応じて、主に例題レベルの解法にじっくりと取り組むコース、さらに修練を重ねるコース、前の学年の学習内容に立ち戻ってからゆっくり進めるコースなど、児童の学習目標を変えて指導しております。3学級を5人の教員で指導する場合などは、必ずしも5つのコースに細分しませんので、中には指導内容・指導方法が同一のコースもあります。また、コース分けにおいても、単元ごとに事前のレディネス・テストの結果等を基に実施しております。「あの先生に習いたい。」という要望も寄せられる習熟度別指導ですが、御理解をいただきたいと思っております。